高官が次々に消える国

週のはじめに考える

習氏は中
以降、「反
民解放軍の
次々に政治
対勢力のな
た。李氏の

時代を読む

自分ルールの危うさ

専修大学教授　山田　健太（やまだ　けんた）

ハロウィーンを巡り渋谷をはじめ全国各地で規制線が張られ、移動の自由が制限されている。傍若無人の若者らの振る舞いに眉をひそめる大人たちの対抗策といえよう。車をひっくり返すなどの破廉恥行為が許されるはずはなく、雑踏による人身事故も防がなくてはなるまい。現状は、スムーズな通行や平穏な生活維持のために、現代版お祭りで人が集まることを禁止・制限することに向かいがちだ。DJポリスのようなソフト警備から、より一段進んだハード警備が有力な選択肢となっている。

近年、こうした私権制限が日常生活に深く浸透した最初は、東日本大震災時の福島第1原発事故に伴う居住や立ち入りの禁止措置だ。それは今でも続くが罰則を伴う法的措置も含め、被ばくリスク回避のためのやむを得ない措置として、広く受け入れられている。さらにコロナ禍ではさまざまな自粛措置がとられ、移動も集会も営業も広範に制限を受けた。こちらは明確な法根拠がないまま実施され、しかも大きな特徴は市民がそれを後押ししたことにある。

◇◆◇

市民的自由の制約が緊急事態においては政府の方針で簡単に実施されることへの慣れが社会に定着し、日常の一時的な移動制限くらいなら「仕方ない」「当然」との受け止めが社会の空気感だ。さらには、こうした規制を規制と思わない当事者＝若者たちがいる。そこには「ルールは自分で決める」という価値観があるからと推測され、それが故に「来るだけならいいと思った」という自己判断が全てで、結果として規制という事実を気にしない、規制に反対しないという行動様式をとっている。

その結果として、制限や規制に鈍感な社会ができあがっていくことにならないか。それは、明確に意識されないまま、じわじわと自由が縮減していくことであって、取り締まる側には好都合であっても、社会全体にとっては不幸なことだ。

◇◆◇

こうした雰囲気を助長しているのにはメディアの姿勢も影響していよう。制限慣れをして、むしろ空気の醸成に加担しているからだ。北海道で取材中の記者が無断で大学構内に立ち入ったとして大学職員に現行犯逮捕された時も、熱海で写真撮影していた記者が無断で私有地のテラスに立ち入ったとして書類送検された時も、当該新聞・通信社は警察に謝罪し、記者の行為が違法であることを認めた。記者が通常は遠慮すべきエリアに入ることは、その取材対象が公共性・公益性がある場合「正当な業務」として法的にも認められているし、ましてや緊急性や非代替性がある場合は堂々と入ってしかるべきだ。

大学や警察といった制限する側の措置が必要以上に過剰である場合はなおさらである。にもかかわらず、取材する側が社会の「規制は当たり前」の空気に押され、どんどん自らの首を絞める状況が続いている。つい最近には、出所者の個人情報を得て取材した行為が問題視され、教えた職員が諭旨解雇されたが、取材源を守れなかったという問題は残るにせよ、当該放送局もそれを報じた新聞社も、記者や情報源の処分を当然視してしまっている。

ジャーナリズムの役割は、与えられた取材機会を最大限に活用することで、私たちの知る権利に資することにある。自ら限界を定めることは、自由を手放すことにつながる。

2023.11.5

「知らない人と、新聞を通してつながることができた」。そう書かれた投稿が都内の中学生から寄せられ、3日の「発言　若者の声」に掲載しました。

この中学生は、自宅の前にロシアからの爆弾が落ちてきた夢を見て、戦争の恐ろしさが分かった気がした、という投稿をして10月13日に掲載されました。これを読んだ高齢の

新しい朝刊小説の連載が
した。「のぼうの城」（小
「村上海賊の娘」（新潮社
れる人気作家、和田竜さん
の一色（いっしき）」です。和田さんに
「村上～」以来10年ぶりの
です。読者の皆さんの発言
のある5面に毎日掲載して
今日は小欄とともに第11回
ました。

新聞には1面から最終面
まざまな情報が載っていま
のすみずみまでお役に立て